

短期不安定投資は複利の認識必要

長

期安定投資が投資の要諦である、というのはまったくそのとおり。言い換えれば、家計バランスシートの「資産の部」のうち「金融資産」の過半は長期安定運用を心掛けるべきだと思う。それが王道というもので、反論の余地なしだろう。しかし、一方では、王道だけしか語られない文化は底が浅いとも思う。

資産運用には部分的に「短期不安定投資」があつていい。また、それによってこそ自己の存在を実感できる人も少なくないはず。多くの場合、人生にはいくばくかのスリルは必須だ。したがって、私は「つねに長期安定運用を心掛けよ」とは言わない。

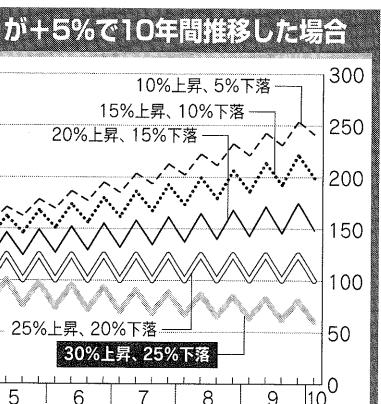
ただし、一般に短期不安定投資を長期にわたって続けると、直感的に思い描いているような投資成果が得られないことが多い、という点には留意する必要がある。それを知つてもうのは簡単だ。たとえばA銘柄（あるいはファンド）の価格が、3ヵ月

以上はいずれも期間5年の場合だ。さらに長い10年で考えてみよう。一つの例として、3ヵ月ごとの変動率が「3%上昇」「25%下落」で運用していくとする。さて、10年後の資産価値はどの程度だと推測されるだろうか？ 結果は図3にあるとおり。すなわち、10年後の資産価値はわずか60・2%にすぎない。

おそらく、多くの読者は「6カ月ごとに差し引き2%の上昇で年に4%、5年だから20%程度は上がって120%くらいかな」とお考えではないか。これはまったくの間違い。

以下のような「直感」と「実証」との差は何に起因するのか。おそらく、私たちは直感的には複利を認識していくのだろう。つまり、少な

くとも直感的なレベルでは、単純に数字を積み上げたり、掛け算で数字を処理してしまいがちなのではないか。であればこそ、直感では把握しにくいが、とても大切なこの種の基本的な数理には慣れてしまいがちなのではないか。おいたほうが多いと思う。



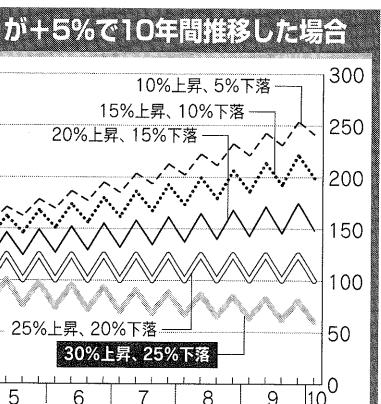
2007.12.1 | オール投資 60

の主張は通らないのである。つまり、上昇率と下落率の差が同じであつても（たとえば4%とか5%というように）、アップダウントの変動率が大きいほど、資産の目減りは激しいことには特に注意が必要だ。もちろん複利効果のつねことで、資産の目減りが起こる場合は期間が長くなればなるほど、その目減りは大きくなることは明確である。

おぞらく、多くの読者は「6カ月ごとに差し引き2%の上昇で年に4%、5年だから20%程度は上がって120%くらいかな」とお考えではないか。これはまったくの間違い。

以下のような「直感」と「実証」との差は何に起因するのか。おそらく、私たちは直感的には複利を認識していくのだろう。つまり、少な

くとも直感的なレベルでは、単純に数字を積み上げたり、掛け算で数字を処理してしまいがちなのではないか。おいたほうが多いと思う。



2007.12.1 | オール投資 60

長

期安定投資が投資の要

諦である、というのは

まったくそのとおり。言い換

えれば、家計バランスシート

の「資産の部」のうち「金融資

産」の過半は長期安定運用を

心掛けるべきだと思う。それ

が王道というもので、反論の

余地なしだろう。しかし、一方

では、王道だけしか語られな

い文化は底が浅いとも思う。

資産運用には部分的に「短

期不安定投資」があつていい。

また、それによってこそ自己

の存在を実感できる人も少な

くないはず。多くの場合、人

生にはいくばくかのスリルは

必須だ。したがって、私は

「つねに長期安定運用を心掛

けよ」とは言わない。

ただし、一般に短期不安定

投資を長期にわたって続ける

と、直感的に思い描いている

ような投資成果が得られない

ことが多い、という点には留

意する必要がある。それを知

つてもうのは簡単だ。

たとえばA銘柄（あるいは

ファンド）の価格が、3ヵ月

40%の上昇じゃないのか」と

おわりのとおり、

40%の上昇じゃないのか」と

おわりのとおり、

おわりのとおり、